松山窯（まつやまがま）

登り窯の様子（イメージ図）

【松山窯】

江戸前期、世界の名陶と謳われた古九谷ですが、わずか四〇年程で廃絶しました。その後江戸後期に青手という色釉で塗り埋める手法で再興したのが吉田屋九谷です。

吉田屋はわずか一年余りで山代に窯を移します。以後、山代が九谷焼の中心窯となりましたが、吉田屋から宮本屋に窯が譲られると、青手から赤絵細描手が主流となりました。

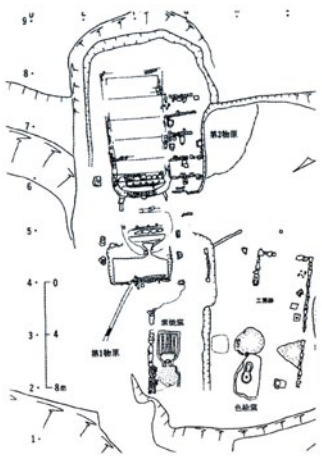
松山窯は、青手が途絶えるのを惜しんだ人々によって、大聖寺藩の直営窯として開窯したと伝えられています。そのため藩の御上窯といわれました。製作された作品の多くは青手でしたが、わずかに赤絵も作られていました。他にも色絵の高級品以外に、日常食器の陶器類も生産していました。

窯跡は、松山城跡から北に延びる尾根の先端近くにあり、焚口から胴木間といわれる燃焼室を経て、製品を窯詰する五房の焼成室を備えた、全長九・四ｍの連房式登窯でした。近くに素焼窯と色絵窯跡も確認されています。

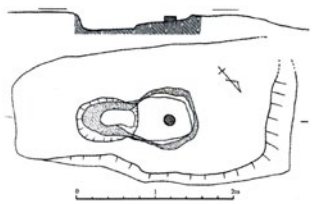
絵付師は粟生屋源右衛門や、松屋菊三郎が知られており、大蔵寿楽などの名工も輩出しています。

松山焼鴛鴦図盃洗

勅使地区在住の九谷焼作家たち



昇り窯跡図（参照：資料編「全体実測図」）



色絵第１窯跡実測図

松山窯跡実測図

【勅使の窯】

松山窯は明治五年頃廃窯したようですが、そこに従事していた職人は、周辺にそれぞれ新窯を築いて独立していきました。現代に続く九谷焼の素地は、ほとんどが松山窯系統の職人によって継承されています。勅使の東野次郎吉の窯もその代表的な窯でした。窯跡は勅使神社背後の斜面にありました。

東野窯は、現在まで継承している唯一の窯元で、かたくなに江沼九谷の手造りによる器造りにこだわった素地供給窯です。

勅使町には東野窯の他にも、前川忠五郎・北川清八・木下源一の窯がありましたが、そのほとんどは大正時代に廃窯しています。

勅使東野窯製品

【栄谷の窯】

松山窯にいた北出宇与門が開いた北出窯があり、富本憲吉によって青泉窯と名付けられました。塔次郎・不二雄・昴太郎の歴代有名作家を輩出しており、稲手忠弘ら弟子の多くも九谷作家として活躍しています。上出喜山窯は皇室御用達を受けており、初代松田蘇川などの名工も知られています。